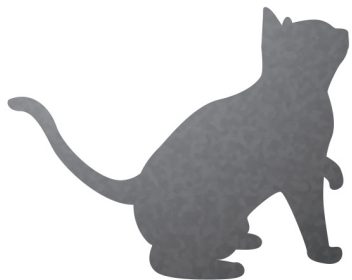


恋色パレット ～赤色～

著・螺旋

イラスト・久弥、螺旋、他一名



青山ライフ出版

目次

第1章	赤い糸……………	4
第2章	出逢い……………	8
第3章	志水花音という男……………	19
第4章	仮文際……………	27
第5章	本日も晴天なり……………	31
第6章	綻びと決別……………	39
第7章	再び愛結び、恋結び……………	43
最終章	過去の君と愛しさと赤……………	51

第1章 赤い糸

運命。それは目に見えないながら確かに身近にある存在。あまりに不確かで形容し難いソレは何時でも俺のすぐ傍にあった。

果たして「ソレ」は何か。

正直、夢物語のようで話したくはないのだが其れでは話が全く進まないので続けよう。皆はよく巷で云われる「運命の赤い糸」を御存知だろうか。かいつまんで話すと……運命で結ばれた二人は見えない赤い糸で繋がっており、何時か出逢いを果たす……といった代物だ。殆どが男女であろうが中には同性でも運命を味方にした糸に導かれるのかもしれない。まるで甘ったるい恋愛ドラマにでも出て来そうな言葉ではあるが、俺にとって「ソレ」は甘ったるい睦言でも先に話した夢物語でもなかった。なら一体何であるか。賢い人なら此の流れ的に御理解頂けているかもしれないが、要するに俺は其の「運命の赤い糸」がハッキリと己の肉眼に見えていた。勿論全てが見えているのかは判らないのだが今迄目にして来た人達の大半が左手の小指に、俺以外には影すら見えない赤

い糸を絡ませていた。そして糸の先には恋人。妻や夫。好きな人等々と様々な人が同じ糸を絡ませている。

ちなみに大体色は同じだが、感覚的には何となく違うのだ。雰囲気とでも呼ぶべきかもしれない。幼少期は皆に見え、確かに存在すると思っていた。其れが両親の言葉によって俺にしか見えないと知った時の衝撃、そして知って良かったと安心した気持ちは今も忘れられない。知らなければ俺は「夢見がちな痛い男」という汚名を背負うことになったのだから。

閑話休題。大分話がズレたが俺にしか見えない糸の行方を追って、内心で二人を応援するだけだった隠れお節介（？）の俺だが……そんな俺の小指にも昔から赤い糸は結ばれていた。少しオレンジに近いような、例えると夕焼けの空で染めたような色は何年経っても変わらない。綺麗なのに少し寂しい気持ちになる赤。もしかしたら相手を連想させるのかもしれない。けれど、俺の持つ色と同じ糸を結ぶ人は決して俺の前に現われようとはしなかった。

好きになった女の子が「運命の糸」に導かれるように同じ糸の男と結ばれる度、俺を慰めた赤は何時しか単なる御守り程度の存在になっていたのだ。

そんな相手なんて居る訳ない。

けど、何時かは……

結局淡い中途半端な期待を捨てきれない儘俺は高校に進学し、志水花音しみずかのんと出逢った。

桜の舞い散る少し肌寒い春に

寂しさを覚えるような夕焼け空を背に

子どものように微笑む彼奴の顔が

本当に綺麗だったことを

俺、銀杏しろがねぎょうすけ柕は今でも忘れていない